

学び創造研究会に行きたくなる！

Web版

Booklet 信教

2026.7
vol.149

学び創造研究会

令和8年度

- 共同研究者の紹介
- どうしてこのテーマで行うのか、校内での取り組み、職員間の学び合い、みんなで目指したい姿...これまでの「私たちと子どものあゆみ」を紹介しています。

ベースとなる授業観

「子ども自らが、心ゆくまで探究する」授業



弾む！校内研修



個別最適・協働を目指して



有識者との共同研究



友との関わりを大切に研究



〈ベースとなる授業観〉

「子ども自らが、心ゆくまで探究する」授業

☆「自分たちが本当に追究したい研究がそこにあります」

自分の研究をもっと深めたい、学校研究を広く公開して学び合いたいと希望する授業者や学校が研究を進めています。ベースとなる授業観「子ども自らが、心ゆくまで探究する」をふまえた、独自性が生きる実践研究です。

☆「子どもたちと共に歩んでいる道筋が分かる研究です」

授業者や学校が、子どもたちとどのように授業づくりをしているのか。その“研究のプロセス”を大切にします。いわゆる学習指導案は、既存のスタイルにとらわれない「私たちと子どものあゆみ」として、それに代えています。

☆「指導者ではなく一緒に研究していく共同研究者を置きます」

指導を受けるという形ではなく、共同研究者として一緒に研究に携わってもらう形です。各分野で造詣の深い先生方に加わっていただくことで、研究に厚みが生まれます。また、共同研究者の先生方には大会当日にワークショップ(もしくは講演)をしていただきます。

参加される皆さんにとって、自らの子ども観や授業観を見返すきっかけとなり、また学校教育活動の活性化を図る一助となることが期待できます！

次ページから、全 18 研究の「私たちと子どものあゆみ ver.1」を紹介！



△事前研究会の様子から△

授業づくり

10/7 (水)

研究校

岡谷市立岡谷北部中学校

共同研究者

二木 治樹（信濃毎日新聞社）

信濃毎日新聞社N I Eアドバイザー。信州大学教育学部で講座「新聞活用教育概論」を担当。県内の小中学校・高校で、新聞を生きた教材として使い、教育効果を高める実践や授業研究を支援している。



社会とよりよくかかわりながら幸せに生きる力を育む

本校がグランドデザインの中でめざす生徒の姿は、「私（たち）はどう生きていくか？」の問いに立ち、「社会とよりよくかかわりながら幸せに生きている自分」を自ら追究していく姿です。教科を問わず学習とは、自分の「なぜ？」や「どのように？」という問いを、友や教師、さらに地域の人とともに対話を通して解決していく営みです。ゆえに学習の過程も学習の場も学校の中だけで完結するものではなく、常に実社会との対話を指向するものでありたいと思います。そこで、本校では次の二つのことに重点を置き授業づくりをすすめています。

- ①課題を見出し、解決に向けて自らの考えをもち、必要感をもって対話が成立する素材の教材化。手だての一つとして、社会への関心を高めながら、さまざまな社会的事象を自分ごととしてとらえ、考えを深めていく新聞記事の活用
 - ②教科でめざす確かな力の習得を通して、友や社会とかかわり合いながら学びを深める学習過程の実現
- この二つの具体を学び創造研究会での実践を通して、生徒の学びの姿から明らかにしたいと思います。

学校づくり

10/20 (火)

研究校

長野市立櫻ヶ岡中学校

共同研究者

渡辺 貴裕（東京学芸大学）

教育方法学・教師教育学。研究テーマは、演劇的手法を用いた学習、実践の省察のための対話など。「学びの空間研究会」主宰。著書『授業づくりの考え方』、『なってみる学び』（共著）ほか。兵庫県出身



生徒の感情をゆさぶる授業づくりを通じた教師の学び手感覚の活性化

櫻ヶ岡中学校は、令和8年度、授業づくりを核とした学校づくりである「かがや木プロジェクト」を推進します。本研究の核心は、生徒の「感情を動かす授業づくり」です。意図的な仕掛け（ギミック）と「感情曲線」を共通言語に、生徒の心をゆさぶる授業づくりに櫻ヶ岡中の全職員で挑戦します。

また、本年度は研究テーマへのアプローチとして教師の「学び手感覚」の追究を昨年に引き続き行います。授業前の「まえもぎ」で生徒の反応を予測し、授業後の「あともぎ」では参観者が生徒になりきって学びを追体験します。このプロセスを通じて「生徒観」を磨き、研究会を「生徒目線の対話を楽しむ場」へと変容させます。

さらに「プランニングタイム」や異学年交流「S+TIME」を通じ、失敗を恐れず挑戦し続ける非認知能力を育みます。生徒も教師も自立した学習者として共に育ち、ウェルビーイングな学校を櫻中全員で創り上げます。一年間、「おもしろがって」行う櫻ヶ岡中学校全員がいのち輝く姿をぜひご覧ください。

学校づくり

10/22 (木)

研究者

三枝 祐紀（八坂小中）

共同研究者

楠見 友輔（信州大学 准教授）

信州大学教育学部准教授。博士（教育学）。専門は、教育方法学、インクルーシブ教育など。主著に『子どもの学習を問い直す』（2022年）、『アンラーニング質的研究』（2024）年、『人新世の教育論』（2026年）



人と人がともに歩むことを学ぶ学校へ～異年齢の学びを通して～

今、教職大学院で学び合うコミュニティ（PLC）としての学校づくりについて研究をしています。研究のフィールドは、大田市立八坂小中学校。長野県で初めて、施設（校舎）は離れていますが、一つの義務教育学校になった学校です（開校4年目の途上）。今年、TOCO-TONの実践校の一つにも指定をいただいています。

学校づくりに参画する過程で、教師間の対話と協働を通じ、子どもの学びや育ちに資することを目指しています。

それに向けたアクション（実践）の一つが「いっしょのじゅぎょう（異年齢の学び）」です。“いっしょのじゅぎょう”を通じ、同僚の先生方とともに考え合い、目指す子ども像に迫ろうとしています。現在、私は担任をしておりません。授業をひらき見合うことを通じ、子どもの日々の姿を見とることができるのは、同僚の先生方の毎日のご実践の営みのおかげなのだと思います。授業を見合ったり実践したりしながら感想（省察）を交流していると、その対話には「ありがとうございました。」の言葉が必ずと言っていいほど付いていることに気づきます。微力ながら、大人も子どもも、互恵しながら実践を進める挑戦にすることができれば幸いです。

国語

10/30 (金)

研究者

遠山 恒輝（埴生中）

共同研究者

大井 和彦（信州大学 講師）

長野県高校教諭、国立中等教育学校教諭を経て、現職。専門は、国語科教育学。言語生活と規範的言語とを繋ぐ言語活動の構築と、自他の感性の涵養を目指した探究的学習を志向している。



物語文に伏線は必要か～生徒と共に考える物語教材～

最近こどもたちの中で、「変な家／雨穴」「ワンピース／尾田栄一郎」「VIVANT/TBS テレビ」など、自分自身で考察する作品が流行しているように思います。最近では、「伏線回収」という言葉もよく聞くようになりました。こどもだけでなく、大人も「考察すること」を楽しむ時代になっているのではないのでしょうか。

昨年度から中学校2年生の物語教材に、新しく「ヒューマノイド／伊坂幸太郎」が掲載されました。この作品の中にはたくさんの「伏線」が盛り込まれています。教科書では「伏線」を「小説などにおいて、後の展開に備えて、それに関連した事柄を前の方でほのめかしておくこと」と定義しています。「伏線」を探す活動や、「伏線」を手がかりに作品を読む活動を通して、生徒が物語をより楽しんでもらえるのではないかと考えました。繰り返し出てくる言葉や、場面ごと起こった出来事などに着目して伏線を見つけ、結びつけて読むことで、言葉や行動の意味を考えられる授業を目指します。

探究的な学び

研究校
伊那市立伊那中学校

共同研究者
谷内 祐樹（信州大学学術研究院教育学系 教授）

公立中学校・附属松本中学校教諭（国語科）、NITS 次世代型教育推進センター研修協力員、県教育委員会学びの改革支援課指導主事・主任指導主事、附属松本中学校教頭を経て、令和6年度より現職



子どもたちはどう学ぶのか～探究的な学び方の更新に向けて～

本研究は、生徒自身が学習の「方法・手順」を自ら決定する「選択」を重視します。教師が提示する「課題・目的」に対し、生徒は思考ツールや学習形態といった多様な選択肢から、目的に応じた最適なものを考えます。たとえ選んだ方法がうまくいかなくても、試行錯誤を繰り返しながら、探究していくことを通して、生徒はより自分に合った学び方を見出し、経験することを通して自覚していきます。私たちはこうした「学び方の更新」を目指します。

そのため、生徒が「自分で確かめたい」と思える課題の提示や個々の選択肢への理解を深める支援を重視します。さらに、学習後の「振り返り」を通じて、選択の理由や結果を価値づけることで、生徒は自身の成長を自覚し、学ぶことの本質的な楽しさを実感できるようになります。このように、自らの学びが「楽しいもの」へと変わっていく喜びを原動力に、生徒が主体的に学びを深めていく教育活動を、全職員で推進していきます。

英語

研究者
山田 裕也（屋代高校附属中）

共同研究者
佐藤 大樹
（国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部
中学校英語学力調査官（併任）教育課程調査官）

長野県内公立中学校教諭、信州大学教育学部附属長野中学校教諭、長野県教育委員会事務局南信教育事務所学校教育課指導主事を経て現職。



聞く力を高めるための単元展開及び授業展開の在り方

本校の生徒は、日々の授業において、英語で自分の考えを話したり書いたりする活動を段階的に繰り返すことで、話すこと及び書くことに関する資質・能力を伸ばしてきました。一方で、聞くことに関しては体系的な指導が確立できていないため、「長い文章を聞き取ることが難しい」や「ペアやグループの友だちが話していることが理解できず、会話を継続することが難しい」といった課題を抱えた生徒がいます。そこで、まとまった分量の英語を聞いて概要・要点を捉えたり、複数人で会話をする際に友だちが話す英語を聞き取り、その内容を踏まえて会話を継続させたりする言語活動を段階的に繰り返すことで、聞くことに関する資質・能力を育成していきたいと考えました。

多様な他者とのコミュニケーションにおいては、相手の考え・主張等を適切に理解した上で、自分の考えを述べる必要があると考えています。そのような真のコミュニケーションを目指して、聞くことの指導を充実させていきたいと思っています。

理科

研究者
田口 智一（旭ヶ丘中）

共同研究者
香山 瑞恵（信州大学工学部 教授）

信州大学工学部長・副学長（産学官・社会連携担当）。2000年電気通信大学大学院情報システム学研究科修了。博士（工学）。電気通信大学大学院助手、専修大学助教授等を経て2007年2月より信州大学工学部電子情報システム工学科勤務、2014年教授。2024年より現職。



生徒が実感をもって理解を深めることができる理科の授業づくり

これまで私は、目に見えない事象の可視化やモデル化を通じ、生徒が言葉や図で論理的に説明できる力の育成に取り組んできました。今年度は、ICT機器を用いた実験結果の「見える化」により、生徒が意欲的に法則性を発見する姿を目指します。

第3学年「エネルギーの変換と保存」の学習では、目視による電流計・電圧計の読み取りでは誤差が生じやすく、目的以外のエネルギーへの変換を結果から実感・納得することが困難でした。そこで本実践では、デジタル計測器とセンサーを活用して発電量をリアルタイムにグラフ化し、エネルギーの量を可視化します。測定作業の負担を軽減することで、生徒が予想とデータの差異に目を向け、根拠に基づいて深く思考することができると考えます。

このようなICTを活用した体感的な学びを通じ、生徒が本質を理解する喜びを実感し、互いに熱量を持って語り合える授業をどのようにデザインしていくか。先生方と活発に意見を交わしたいと考えます。

授業づくり

研究校
松本市立清水中学校

共同研究者
東原 義訓（信州大学 名誉教授）

専門領域は教育工学。教育の情報化のための、システム開発、教材開発、教員研修、授業設計支援等に従事。新潟県、渋谷区、飯田市、喬木村など多くの自治体のICT・探究アドバイザーを務める。



私がつくる私たちの学び 一子どもの自己決定を促す授業づくりー

「なぜ、本校の生徒は自分で学び方を工夫できないのか」——全国学力・学習状況調査の結果は、私たちにそう問いかけてきました。正解を効率よく伝える授業から脱却し、生徒が自ら問いを立て、解決に向かう授業づくりへ。本校の研究は、そんな切実な問題意識から始まっています。

目指すのは、三つの転換です。一つ目は、教師が「教える人」から「伴走する人」へと役割を変えること。昨年度の夏季研修で教師自身が探究を体験し、その楽しさと難しさを実感することから取組を始めています。二つ目は、生徒が見通しを持ち、一人一台端末を駆使しながら「自分なりの学び方」を選び、調整していく自律的な学びです。三つ目は、授業を「受けさせられるもの」から「自ら創るもの」へと変え、生徒が「当事者意識」を発揮できる環境の実現です。

各教科での探究的な授業、一人一台端末の対話的な活用、そして数値に表れない生徒の変容を丁寧に捉えること——これらを柱に、「対話から思考を広め、深められた」「新たな価値を生み出すことができる」と感じられる生徒を育てていきます。ぜひ、授業の中にその芽吹きを見つけてください。

音楽



研究校 11/17 (火)
白馬村立白馬南小学校
 共同研究者
蓑手 章吾 (ヒロック初等中部 運営ディレクター)

都内に4校展開するオルタナティブスクール HILLOCK 初等中部を創設、運営。元公立小学校教員で、教員歴は14年。著書『子どもが自ら学び出す！自由進度学習のはじめかた』（学陽書房）



「自分らしく学び続ける子」を支える学校づくり

「みんなで Happy」を合言葉に「子どもが創る学校」づくりをすすめています。学校は「ある」ものではなく、子どもたちが「つくる」もの。一人ひとりが自分らしくあることを大切に、自律的に学びや生活をデザインすることで、自分たちの手で「Happy」を創り出し、分かち合える学校を目指します。

正解ではなく納得解を見つける対話。失敗を恐れず、トライ＆エラーを繰り返せる場の設定。授業の中に自己選択・自己決定ができる場をつくり、自分で学びを調整する力を育てます。適切な学習環境づくりと子どもに寄り添った伴走支援で、仲間と協働しながら「自分らしく学び続ける子ども」の育成に努めます。

図工



研究校 11/17 (火)
長野市立緑ヶ丘小学校
 共同研究者
青山 由貴枝 (長野県立美術館 学芸専門員)

学芸課学習係長。美術館を拠点にアートと人をつなげる方法を研究しながら、子どもから大人まで、障がいのある方を問わず誰にでもひらかれた美術館の実現を目指している。2018年より現職。



子どもの想像力×創造力を高める造形あそび

3年前から「おもしろい」を実感する学校創りの一環として、全校で「図工の日」を実施しています。各学年が発達段階に応じた題材を設定し、6月から11月の間に1日、子どもが造形遊びに没頭する時間を保障しています。従来の図工では、時数や教材開発の制約から教師主導になりやすく、子どもに内在する想像力や創造力が十分に発揮されてこなかったという反省もあります。「図工の日」では、子どもの表現や姿を通して教師自身の子どもの観を見直すことを目指しています。昨年度からは、長野県立美術館学芸専門員の青山由貴枝氏と共に、鑑賞を通した子ども理解や授業観について学んでいます。研究会当日は、授業公開や作品発表（鑑賞）、「そうぞうトーク」、鑑賞ワークショップを通して、教師が子どもを真ん中に据えた「わくわく」する授業づくりについて考えを深めていきます。

探究的な学び



研究校 11/18 (水)
下諏訪町立下諏訪南小学校
 共同研究者
岩川 直樹 (信教教育研究所 所長)

教育の臨床的な研究をしてきている。教育現場で出会った子どもや教師の姿、教室の出来事や教師の語りにふれながら、そこに起きていることの意味のゆたかさを分かち合うことば（概念）を探ろうとする探究。あらゆる問題を個人の内側に閉じこめる言説が広がる社会のなかで、人と人とのふれあいと分かち合いに教育の根源的な意味があることに立ち返るような時間を共有したいと考えている。



子どもが夢中で学ぶ～探究的な学びを考える～

「探究的な学び」が表出されている子どもの姿とは、どのようなものなのか。昨年度その点をスタートとして、子どもの具体的な姿から思案してきました。そして導き出された姿は、子どもが「夢中」になっていること。材に、問いに、願いに、心を奪われまっすぐに向き合っていれば、自ずと課題解決に向けた対話が始まり、発見があり、新たな疑問へと続くサイクルが生まれるのではと考えました。その実現に向けて本校で取り組むのが「単元を通した授業構想」です。子ども・教師の問いや願い、つける力が単元を通して根底に流れていることで、子どもの思考の深まりや変化を単元という長いスパンで追いかけることができます。「できた」「分かった」という評価だけではない、“その子一人一人”の背景にある学びを見出すこともできるでしょう。その際大切にしたいのは「教師の見取り」です。子どもの言葉や表情、動作から、私たちは子どもの学びをどう捉え、何を意味づけ、価値づけるのかといった多角的な視点が必要となります。日々の授業実践の積み重ねから、子どもの「夢中」の先にある探究的な学びについて深めていきたいと思います。

個別最適・協働



研究校 11/18 (水)
松川町立松川北小学校
 共同研究者
山浦 貞一 (信州大学大学院教育学研究科 特任教授)

道徳教育・特別活動・キャリア教育を中心に実践的な研究を行ってきた。現在は、「学び続ける個の育成」をテーマに自立的に知を働かせる学びの創造を願い、下伊那地域の学校で共同研究に携わっている。



「子どもが主語」の学校 ～自立した学習者の育成を目指して～

本校の研究は、完成された授業を披露する場ではなく、子どもたちと全職員が歩んできた「ありのままのプロセス」を共有し、参観される皆様と共にこれからの教育を考える場でありたいと考えています。本校では今、考える前に「わからない」と諦めてしまったり、思考を止めてしまったりする子どもたちの姿にどう向き合うか、という課題に直面しています。そこで、今年度は研究テーマ「自立した学習者の育成」のもと、共通言語として「北小 学びのピラミッド」を掲げ、授業だけでなく行事やたてわり活動を含む学校生活全体の中で、教師が「教え手」から「伴走者」へとどう立ち位置を変えていけるのか、日々試行錯誤を繰り返している最中です。当日は、本校職員の悩みや葛藤も含めた「歩み」を提示します。参観いただいた子どもの姿を基に、「児童一人ひとりが自立した学習者になるために、私たちに何ができるか」を、ぜひ一緒に語り合っていたいただければ幸いです。

学校づくり ✨

研究校 11/18 (水)
須坂市立須坂小学校・須坂支援学校

共同研究者
楠見 友輔 (信州大学教育学部 准教授)

信州大学教育学部准教授。博士 (教育学)。専門は、教育方法学、インクルーシブ教育など。主著に『子どもの学習を問い直す』(2022 年)、『アンラーニング質的研究』(2024) 年、『人新世の教育論』(2026 年)



子どもとともにつくるインクルーシブな学校

本年度、須坂小学校・須坂支援学校は共通研究テーマ『子どもとともにつくるインクルーシブな学校』に沿って、授業づくりを進めています。その中の二つをご紹介します。

一つ目は、須坂小と支援学校との「つながり」を意識した交流及び共同学習です。須坂小学校・須坂支援学校全校縦割り班活動の『なかよし交流』では、月に二回程度の頻度で十五分間の交流学习を通年で行っています。今年度は、新たに運動やカードゲーム、読書など「自分たちのやりたいこと」を基に班を編成しました。また、六年松組と支援学校にじ組は、今年度、総合的な学習の時間と生活単元学習の授業の中で、年間を通した交流及び共同学習を積み上げ始めています。

二つ目は、通常学級での多様な子どもたちを包み込む授業づくりです。一人一人が自分らしく豊かに育っていく授業の可能性について、学習環境や方法だけではなく、私たち教師の在り方についても問い続けていきたいと思っています。

授業づくり ✨

研究校 11/20 (金)
信濃小中学校研究部

共同研究者
佐藤 和紀 (信州大学教育学部 准教授)

博士 (情報科学、東北大学)。東京都公立小学校主任教諭等を経て現職。専門分野は教育工学、教育方法学、特に情報教育、初等教育における教育方法。文部科学省初等中等教育局・視学委員など。



子どもと共に授業を創る ～深い学びの実装を目指した授業のあり方～

本校では昨年度から、「自ら学びとり表現する児童の育成」をテーマに、子どもが学び方を選び、学習の過程を振り返る授業づくりに取り組んできました。単元の見通しを共有したり、学習方法を子ども自身が選択したり、学習の終末に自分の考え方や学び方を振り返ったりする中で、子どもたちは少しずつ自分に合った学び方を意識するようになってきました。

その中で、「先輩たちがどうやって学んでいるのか見てみたい」という子どもの声が生まれました。本研究会では、この声をきっかけに始まった、子どもも授業研究に参加する取組を公開します。他学級・他学年の子どもが授業観察者となり、友達の学び方や教師の関わり、教室環境などへの気付きを共有します。教師はその声を授業改善に生かし、子ども自身も他者の学びを見つめることで、自分の学び方を見つめ直します。子どもの声や気付きを大切にしながら、教師と子どもが共に授業を創ることを目指します。

体育 ✨

研究者 11/26 (木)
塩原 一矢 (白馬北小)

共同研究者
藤田 育郎 (信州大学教育学部 准教授)

専門は体育科教育学。主な著書 (共著) に「体育科教育学入門」「初等体育授業づくり入門」など。



“対話”で高め合う体育学習 個でも集団でも学ぶことができる集団作り

体育の授業で、子どもたちが自分の体と向き合い、「できた」「少し変わった」と実感する瞬間、学びは大きく動き出します。特に、マット運動は、自分の動きを試し、仲間の動きを見取りながら、技の質を高めていく魅力ある領域です。

一方で、「できる・できない」が見えやすく、苦手意識をもつ児童が挑戦をためらうこともあります。友だちを励ます温かな関わりを、動きの様子を具体的に見取り、次の動きにつなげる対話へと深めていくことも大切です。本授業では、目で見てわかる動きの様子である「ポイント」と、感覚的な言葉や比喩で表される「コツ」を、運動資料を手がかりにつなげます。

一人が見つけた「手で床を強く押す」「体を一本の棒にする」「ふわっと回る」といったコツが、仲間との対話を通して共有され、別の子の動きにも生かされていく。個の気づきが集団の学びとなり、集団の学びが再び一人ひとりの動きを高めていく体育の学習をめざします。マットの上で生まれる対話が、子どもたちの学びと動きをどう変えていくのか、ぜひ一緒に見つめてみませんか。

総合的な学習の時間 ✨

研究校 11/27 (金)
佐久市立浅間中学校

共同研究者
藤森 裕治 (文教大学 教授)

佐久市出身。都立高校教諭、信州大学教授を経て現職。専門は国語科教育、幼児教育、日本民俗学。最近の著書に『国語科における中核的な概念とは何か：その研究的考察』(東洋館出版社)がある。



「探検！研究！実践！佐久の未来と歴史」 ～教師が伴走者として自走し、豊かに学ぶ探究学習のあり方～

本校では一昨年度より、「探究学習」に重点を置き、総合的な時間の学習や各教科の授業改善に取り組んできました。これまでの取組を通して、よりよい「探究学習」にしていくための教師の関わり方に課題が見えてきました。そこで今年度は、教師自身が「学びの自走者」として生徒に伴奏することで、生徒が「探究学習」に生き生きと取り組む姿を目指します。

当日は、1年生の時から「探究学習」を積み重ねてきた3年生のアウトプットを公開します。また、中学1・2年生や浅間中学校区の小学生、近隣の高校も同時にアウトプットする場を設ける予定です。「探究学習」を積み重ねてきた3年生の姿に加え、浅間中学校区の子どもたちがどのように成長しているかといった、縦のつながりにもご注目ください。参会者の方には、3年生のアウトプットに対してフィードバックをしていただくことで、次の「探究学習」につなげていきたいと考えています。

学級づくり ✨

研究者

花岡 眞子（塩田西小）

11/27（金）

共同研究者

岩川 直樹（信教教育研究所 所長）

教育の臨床的な研究をしてきている。教育現場で出会った子どもや教師の姿、教室の出来事や教師の語りにふれながら、そこに起きていることの意味のゆたかさを分かち合うことば（概念）を探ろうとする探究。あらゆる問題を個人の内側に閉じこめる言説が広がる社会のなかで、人と人とのふれあいと分かち合いに教育の根源的な意味があることに立ち返るような時間を共有したいと考えている。



自分や友だちを思いやる子ども ～子どもの内におきている思いをとらえる～

1年生の子どもたちは、友だちと関わる中で、うれしさや楽しさを感じる一方、自分の思いをうまく表現できず、強い言葉や行動になってしまうことがあります。しかし、その姿だけを捉えるのではなく、「本当はどうしたかったのか」「どんな思いがあったのか」という子どもの内側に目を向けることが大切であると考え、このテーマを設定しました。

本研究では、子どもたち一人ひとりの思いや感じたことを大切にしながら、友だちとの関わりを通して、自分の思いだけでなく相手の気持ちにも目を向け、自分も友だちも大切にする言葉や行動を選択できる子どもの姿を目指します。遊びや日々の生活の中で生まれる葛藤や学びを通して、子ども自らがよりよい関わり方を探っていけるような学びを大切にしたいと考えています。

体育 ✨

研究者

寺川 耕平（伊那西小）

11/27（金）

共同研究者

近藤 智靖（日本体育大学 教授）

専門は、体育科教育学・スポーツ教育学。（一社）日本スポーツ教育学会理事長。（公財）日本学校体育研究連合会理事。体育科のカリキュラム研究や教材開発、教師教育を中心に研究を進めている。



すべての児童が関わりをもてる体育授業 一ボール運動領域「ターゲット型」に着目して一

体育の授業で盛り上がる領域の一つにボール運動があります。子どもが夢中になってゲームに取り組んでいる姿を見ると、教師も嬉しい気持ちになるのは誰もが同じだと思います。

しかし、ボール運動領域において、運動が苦手であったり積極的でなかったりする児童については、チーム内でサポート役に回されたり、教師からは頑張っていることを褒める「励まし」が多くなり、具体的な指導がされなかったりするなどの課題が指摘されています。そうした中で、知らず知らずのうちに学習の機会が奪われている子どもがいるという研究報告があります。

そこで、「誰一人取り残さない」をキーワードに、誰もが取り組みやすく、児童一人一人が主体的に取り組むことのできる学習を研究しています。今回は、「ターゲット型」と呼ばれる種目に着目しました。ターゲット型は、一人一人の試行が保障されやすいボール運動領域です。この特徴をうまく使った学習ができないかと研究を進めています。普段あまり目にすることのない「ターゲット型」の学習について、ぜひ一緒に体験してみませんか。